論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	坂井田　瑠衣

論文審査担当者　主　査　諏訪　正樹
副　査　加藤　文俊
副　査　清水　唯一朗
副　査　白井　宏美
副　査　伝　康晴
学力確認担当者：

本論文は，社会的な場面における，身体動作や会話からなる相互行為を微視的に分析し，多重に絡み合い時には互いに制約をもたらす身体的・時間的・空間的な資源（モダリティ）が，即興的に利用される様態を探究するものである．

昨今の相互行為研究では，言語的やりとりだけでなく視線や身振りなどの身体的やりとりも重要な役割を担うという問題意識のもとに，マルチモーダル会話の探究が盛んになってきた．しかしそれらの研究の多くは，言語的やりとりを補う存在 (いわゆる非言語コミュニケーション) として身体的やりとりを位置づけてきた．しかし社会的な相互行為においては，会話と身体行為に主・副の関係があるというよりもむしろ，例えば医療や調理など，身体と会話はともに等しい価値で根源的な資源としての役割を担っている．そういう側面に焦点化した研究は極めて稀である．本論文は，相互行為における身体行動や身体配置などを重要な資源として位置付けること，すなわち，「相互行為の身体性」を重要視した相互行為論を展開する．

もう一つの論点は，実世界における相互行為が，常に個別具体的な状況に埋め込まれている（1980 年代後半から隆成してきた「状況に埋め込まれた認知−situated cognition」という思想）ことである．相互行為は，そのときの現場の個別具体的な状況に埋め込まれ，それに応じて即興的に展開される (「相互行為の状況依存性」).

本論文は，このように相互行為の重要な側面である「身体性」と「状況依存性」を念頭に置き，実世界の社会的場面における相互行為を分析研究のまな板に載せることを試みたものである．

第 1 章では，会話以外の活動を展開するための行動を「会話外行動」，会話外行動が個別具体的状況に埋め込まれて利用される共同的活動を「マルチモーダル・アクティビティ」と新たに定義している．マルチモーダル・アクティビティは，そのつど個別具体的な状況に埋め込まれた即興的な対応の連鎖によって展開することを論じる．マルチモーダル・アクティビティを分析するためには，個別具体的状況を生み出す要因としての多様なモダリティ・参与構造・成員性に焦点化すべきことを主張し，問題の所在を明らかにする．

第 2 章では，本論文が採用する研究方法を説明する．近年盛んになってきた相互行為分析という方法を用いつつも，性急な一般化を避け，状況に依存した動的対応力を丹念に描き出すというアプローチの重要性を主張している．その上で，データと本論文のために筆者が整備した記述方法について概説する．

第 3 章では歯科診療場面を観察し，滞りない診療は，歯科医師と患者双方の会話行動

論文審査の要旨及び担当者

と会話外行動が複合的に絡み合い繰り出されることから成立していることを明らかにする．患者は，歯科医師の一つの行動のみに意味を見出すとは限らず，マルチモーダルな行動が示唆する複数の志向性に対し，自らもマルチモーダルに反応するのだということが明らかになった．本論文では，社会的場面における共同的活動は，会話外行動も含めてマルチモーダルな資源の絡み合いの中から組織される活動であること，すなわち「マルチモーダル・アクティビティ」として見るべきであるという仮説を提示している．

第 4 章では，もんじゃ焼きを協同で調理する場面を観察している．これまでほとんど研究されたことのないドメインであり，相互行為，身体／時間／空間的資源という観点で非常に興味深い相互行為現象の宝庫である．協同調理では，伝達意図を伴わない会話外行動を他の参与者が自発的に観察し，適切だと思う行動を繰り出すことによって調理工程が滞りなく進行したり，発話の反応が得られなくても相手の会話外行動を観察して，不足情報を補ったりすることを明らかにしている．この連鎖構造を「暗黙的協同」として定式化し，発信者と受信者を想定した従来のコミュニケーションモデルでは捉えられないマルチモーダル・アクティビティの一形態を明らかにした点に大きな価値がある．

第 5 章では，歯科診療場面に特有の暗黙的協同として，歯科衛生士による「傍参与的協同」が見られることも明らかにしている．歯科衛生士は，自発的な観察によって診療の環境を整備したり，自ら診療活動に参入するタイミングを見計らったりしているのである．（会話上は中心的参与者ではない）歯科衛生士の傍参与的共同によって多層的な参与構造が構成され，この構造が歯科診療の進行を支えていることが判明した．この分析から，マルチモーダル・アクティビティにおいては，相互行為資源が多層の参与構造を跨いで利用されることが示唆された．

第 6 章では，科学館の展示物解説場面を観察し，解説者が来館者に次の展示物への移動を促す身体的会話的やりとりを分析している．解説者が自ら歩き出すことによって来館者の歩き出しを促すものの，その相互行為を取り巻く空間陣形や語りの構造などによって，来館者がいち早く歩き出したり，歩き出しのタイミングを逸したりすることが示される．これらの分析を通じて，マルチモーダル・アクティビティにおいては，たとえある行動が他者への情報伝達意図を伴っていたとしても，その投射性は個別具体的な状況に強く左右されることが明らかにされる．

第 7 章では，歯科診療場面において，歯科衛生士が歯科医師の会話外行動を観察し，「いままさに話しかければ相手の反応を得られる」というタイミングを見極めること，すなわち相互行為の基盤である「会話場」を形成するためのマルチモーダル・アクティビティを観察している．会話行動や会話外行動は，相互行為に中心的あるいは周辺的に参与している者だけでなく，さらにその外側で立ち聞きしている者にも利用可能になることを明らかにしている．相互行為の最中だけでなく，相互行為を開始する手続きもマルチモーダル・アクティビティとして達成されていることを論じている．

第 8 章では，各章の分析結果を俯瞰し，マルチモーダル・アクティビティの構造的特徴を明らかにしている．(1) マルチモダリティという要因によって参与者の志向が複合的に表示されること，(2) 参与構造・成員性という要因によって多層的な利用可能性が生

論文審査の要旨及び担当者

じることを主張している．さらに，相互行為分析のスキルがいかにして体得されるか，相互行為分析によって得られた知見がいかにフィールドに還元されうるかを，筆者自身の経験に基づいてエスノグラフィックな記述をしている．

第 9 章では，8 章までの分析・議論をもとに本論文の結論を導いている．8 章で議論した二つの構造的特徴を再確認するとともに，共同的活動を研究するための新たな枠組みとして，「マルチモーダル・アクティビティ」，「暗黙的協同」が有用であることを結論づけている．

本論文の独自性は以下の 3 点にまとめられる．

（1）マルチモーダル・アクティビティとは，多重に絡みあう身体的・時間的・空間的な資源を即興的に利用する過程であることを，映像データを用いた微視的な観察と記述に基づいて分析し，論証した．

（2）社会的場面の相互行為の微視的分析から，身体的・時間的・空間的な資源を具体的に明示し，それらがどのように絡みあっているのかを明らかにした．身体的資源としては，口，目，手，上半身，足などによる行動を，時間的資源としては，言語的発話，その統語構造，行為タイプ，語りの構造，参与構造，成員性を，空間的資源としては，参与者同士の位置関係や距離，周辺環境の状態を抽出した．

（3）性急な一般化を避けつつも個別具体的な分析をボトムアップに積み重ねたことで，個別事例に通底して見られる構造的特徴を描き出し，またそれらの事例を記述するための枠組みを提示した．

従来の相互行為研究には，共同的活動の身体性や状況依存性に焦点化したものはあまりない．本論文は，その活動をマルチモーダル・アクティビティと特徴づけ，個別具体的な状況に応じて即興的な対応を繰り出す様態を詳らかにした点で新規性が高い．会話以外の活動を含んだ相互行為を研究する際に考慮すべき構造的特徴や記述の枠組みを提案しており，今後の相互行為研究に有用な知見と進むべき方向性を描き出している．

これらの成果は，著者が，高度な研究を行うために必要な研究遂行能力，及び新たな分野を切りひらく発想力，並びにその基礎となる豊かな学識を有することを示すものと考える．よって本論文の著者，坂井田瑠衣君は，博士（学術）の学位を受ける資格があるものと認める．